なんたる星

August 2016

8

恋をしている

迂回

加賀田 優子

ナイス害

スコヲプ

伊舎堂 仁

Guest

佐藤 聖

【目次】

連作

ギャソリン・・・・THE TANKA

真顔の空・・・・ナイス害

歌人　中田やす江が食事ついて考えていることはない・・・・恋をしている

初夏、柵と錆・・・・迂回

平和・・・・加賀田優子

橙色の葬列・・・・スコヲプ

月（つきだな）棚・・・・佐藤聖

写真短歌・・・・佐藤聖
イラスト短歌・・・・スコヲプ

評文
　操られながら肉を・・・・迂回

編集後記

ギャソリン　　THE TANKA

トリガーAでは死亡者はいなかった、すぐにトリガーBを引く俺
犯人の頭を斧でぶちますという台詞からの犯人発表
人生を狂わせる程の現金を贈呈します拒否権はない
ガソリンをぶちまけたいねなんつってここも録音されてるかもね
ホラ話はここまでにしてお待ちかねなんたる星を紹介しよう
（きをつけてそいつらみんなにせものでただしいほしはきえてしまった）

真顔の空

ナイス害

崩してくカレーライスの水平線　このタレントはだてめがねだね
真顔の空はドッチボールで外野にいる俺のこころのしわをほぐす
四百字詰め原稿用紙柄のシャツにタイトルと名前を書いて
犬の一人暮らしを見た帰りに雪の匂いがして　嘘だろ
太陽が沈むのと同じ理由でおまえは髪を切ってきたのさ
無糖のヨーグルトを上から垂らすとき半開きのくちをジッと見ている
この雨が祝福の紙吹雪へと変わったら誰が掃除するの

歌人　中田やす江が食事について考えていることはない　　恋をしている

踊れない理屈はなくて絶賛のラバーや紙の中パンたべて

バニラ・カラスまたの名を戦国かわいい　わたしのなかの無料の飴玉

来る時刻からさかのぼって本を読む　口に何かをつけようかしら

ありがとう　かるく言葉が出ちゃったらオルガンエリザベスコーヒーでごまかす

かみなりが遅れて鳴っていることも電話で言わなきゃダメだったでしょ　ダメだったでしょ帝国

川柳に負けているからぶぶぶぶぶぶぶぶとか言っちゃうもんべー

ぶぶぶぶぶぶの数をかぞえて読む人がいたらすきよ　たんかだいすき

何かうれしいことを言ってよ　おっぱいが大きいとか、ベスト盤出そうだね、等

中田さん、もう少し食事の事を考えた方がいいわよ、中田さん？

首に手を　月とすっぽんなわたしだからゴミ袋みながら　首に手を

ツーツーツー

中田さん、あなたの短歌を読みました、中田さん、あなたはおっぱいが大きいわ

初夏、柵と錆

迂回

道を敷く粒の直径　眼前に色彩、住処、パラボラの向く
清廉に雨　A4 のコピー紙を緩く親指に纏っている
鉤括弧みたいな猫を撫でている曜日の次にくる月曜日
透明なケースをいのち過ぎてゆくエンマコオロギまであと幾つ
ジャンプ台擁すみどりのプールには刻んだセロファンめいた生きもの
スピーカーきっと満ちよう日曜はポストイットを踏むスニーカー
時つ風　緩く握った掌[てのひら]に息とスピカの鋭利を秘める
パラボラは陽を厭わずに所在する錆びたスポーク朝にこすれる
巡っても初夏に棲みつく草薮に馴染むスピーカーの錆色
猫なんてなんてなんてとつながって腹を撫でろよ襟を正せよ
反射するためにパラボラとわとわとわとわとわとわとわとわ水面に映る

平和

加賀田優子

まちなかのぬりのこしが目立ちはじめる　指をさす　だれとでも目があう
すわりなさい　と運転手さんが言いおんなのこのまゆげはとんがった
これ以上ないセックスのあとでみる悪夢はバランスがとれている
フレンチトーストにおしょうゆ入れますか入れませんか銃殺刑ですか
しんとした空気に先がふれるまで耳のあなにさしこんでゆく
犬の死の知らせを受信するために取得するあたらしい文字列は
ブタメンが絵画のように置いてある　二〇八八・八・一八

橙色の葬列

スコヲプ

それぞれの終着駅が花畑だったらもっとしあわせな朝
電車での密着による嫌悪感を忘れないよう生きてゆきたい
八王子立川国分寺三鷹　花ならどこに咲いてるだろう
ないはずの思い出がある噴水に噴き上げられていたことだとか
はなびらを千切るときにはなるべくは形を保っておきたいと、エゴ
高円寺純情通りに雨が降り傘をささない正しさもある
調子いいとも悪いとも言えなくて△だけを書くような日だ
真珠玉は直径十ミリ程あって電車の旅に似合っていない
ここからは肉眼で見る焼け野原テレスコープを埋葬したら
テンガロンハットはないがカウボーイ無人の団地を横切り歩く
サボテンの味噌汁を飲みシャチに乗るどんな時代も生きてみせるさ

月（つきだな）棚

佐藤聖

五百円ワインを買って帰る日の（ああなんつーかでかい月だな）
意思のない流星ばかり　夏服に付着した星くず払いつつ
凌霄花　三日会わざば　月漿の巡る手首を朝日に透かし
白状をしたいような夜　ありふれたわが名も月を有しておれば
読む本はあるけど気分ではなくてただペルセウスに曝ける未来
似たような感情だけど少しずつ色が違って捨てられなくて
Tシャツと胸の隙間にごくうすく宇宙保ってベランダにいる
新月の重みはきっとこのくらい育てた茄子を一つ手にして
背表紙の丸みを愛す指先の角度でわれの鎖骨に触れよ
体温に近き葉月の暗闇に背を預けつつ月棚となる

闊歩するアリストテレス症候群
この身のちろに誰そ彼の歌

佐藤聖 @SAY0310

20:00の水族館で青年にのみゆるされし航路、はじまる
／佐藤聖『大剣を手に』
Scape

操られながら肉を　　迂回

いざ食べるぞとおもってする食事をここ最近した覚えがなく、つまり生きて生きるの中に溶けきった形態として食事が馴染んでしまって、食べるのは大好きなのにいまいち集中できていない。
最近は所定の温度で長時間かけて肉に火を通す手法を覚えて、それは単にそういう肉を食べたかったからなのだけど、そういう長時間の調理がつくりだす「儀式」じみた行為が感覚を研ぎ澄ました食事体験に繋がったりしないかなーと考えながら肉を茹でている。

なにかがあって、それを感じようとするとき、人のインプットはけっこう外部とか”見せる”ための仕掛けに制御されてしまうねという話で、レンタルで映画を見るより映画館のが面白いとか、とくに興味はなかったけどいざ劇場に行くと予想外に魅入ってしまうとか。
マンガのコマ割りのように、作品と不可分な部分に”見せる”仕掛けが仕組まれていたり。音楽を曲と詞に分けたときにはどっちがどっちのために仕掛けているんだろうねとか。

さて短歌も感じるべきな”なにか”ですね、となったとき、僕はどうもそういう風に魅入ったような引きこまれたような体感を得た覚えが少ない。
それは不思議な話で、短歌は５７５７７のリズムをふかくふかく刻みつけられていて、それは仕掛け以前に定義に近く、リズムはつまり人のインプットを操る手段なのに。僕はとても短歌にコントロールされている気分になれない。

　ホチキスに針装填す　青空を青空としか思えぬ朝に（佐藤聖／『薄明を殴る』）

　濃緋色（クリムゾンレッド）のピアノうぬぼれにソとラの音を朽ち腐らせて
　（佐藤聖／『それまで君は』）

みんなそういう、自分を制御しようとしてくるモノとしての短歌を感じることってあるんだろうかと考える。読みやすさとか丁寧な定型とか破調とか子音の通底とか指摘されているのを見るけれど、指摘している人って”自分で自分を制御している人”に見えてしまって、心地良いとか必然的とかあっても魅入ったのかどうかってよくわからない。
僕が短歌でそういう被・制御を感じるとすれば、それは今のところ佐藤聖の短歌を読み漁ることでしか得られないのだ。
引いた二首は、文の切れと単語の緩急と音の配置がめちゃくちゃ巧みですごく心地良い。全体でも意味を持たせすぎず、”そういうことね”みたいな納得を排してあることで、脳がへんに働かないまま言葉を受け取れる。
心地良さにとらわれて読みきったあとに、意味に凝り固まりきらない単語の”感じ”がついてくる感覚が共有できたら嬉しいなぁとおもう。

量（、それは誰かの願い）コンビニのバウムクーヘン買う手を止めて
（佐藤聖／『ＶＯＣ感覚』）

自制している人のふりをして「めちゃくちゃ巧み」をすこし分析するけれど、つまりは文の属性・言葉の属性・音の属性の配置が巧みということだ。
文や単語には長さに比した意味の軽重がある。「それは誰かの願い」と「コンビニのバウムクーヘン」は後者の方が音として長いけれど、背負わされた詩的な役割は前者に荷重が掛かるし、曖昧で託されたなにかを多く持っている。
読み取るものが多い言葉は読み手を立ち止まらせて、そうでない言葉はすっと通りすぎらせることができる。音の長さが組み合わされば、通りすぎるときにその一部を飲み込む感覚が変わる。それはつまり読み手の読み進める速度と咀嚼の速度をコントロールできる可能性で、上手くすれば読み手の感覚を自在に操り歌に引き込む仕掛けになる。音の属性である子音・母音の効果もまたこれを前提にすることで効果を増す。

深呼吸二十三回程度では癒えない缶の凹みのような（佐藤聖／『猫はしる』）

これらを複合的に、バランスよく、効果的にあつかうセンスの突出という点で、佐藤聖は他に類を見ない歌人とおもう。

さて。読み手を自律的に引き込む短歌というテーマが、ここに現れている。
佐藤自身はときに自作を「短歌らしくない」と評す（twitter 2016/3/4）けれど、定型の韻律を踏み越えたところにある韻律の操作は「短歌らしさ」を奪いうるのだろうか。であるとか。
読み手がいる前提である文芸として、読み手を操る仕掛けを突き詰めるというのはすごく誠実に見えるけれど、それは短歌のなにかを失くしているのだろうか。それとも他の（ここでは扱いきれなかった独特の、煌めく、楽しげな）モチーフ・文体・仕掛けが「らしさ」のを薄めているだけで、この試みは短歌と同居しうる道なのだろうか。
佐藤の表明を鋭くしつづけた先に、短歌はあるんだろうか。

見届けたい。短歌でなくたってまったく構わない。操られながら、肉を噛みしめている。

【編集後記】
マジの匂いする君の為に花束健康法

花束健康法はまず花束を目の前に置きます。大切な人を思って目を閉じます。声を出します（何でもよい）。その声を自分の耳で聞きます。缶のおばけ出ます。桃缶のおばけ出ます。花束を持って渡します。おばけがペコリします。音楽が流れます。あなたが子供の頃一番好きだった音楽が流れます。セリフのない漫画を描きます。海のシーンを描きます。カモメも描きます（鳴き声なし）。漫画ができたら最初に思った大切な人に電話をします。あなたはこう言いましょう「セリフのない漫画を描いたので見てください」

あなたは雨の中、外へ出ます

2016 8/1 恋をしている

I spent the sunset while bearing a vegetable cliff and falling in love in a farm tractor, so that TOKIO sings, it doesn't stop.

ポケモンGO

なんたる星８月号
発行日：２０１６年８月１日
編集発行人：恋をしている・迂回
表紙：スコヲプ
企画：迂回
Guest：佐藤聖

Twitter：@nantaruhoshi
Mail：nantaruhoshi@excite.co.jp

執筆者
迂回（@ukaian）
ナイス書（@NiceGuuuy）
恋をしている（@yayoikenumai）
スコヲプ(@scope_scape)
加賀田優子（@0ccak）
伊舎堂　仁（@hito_genom）

ポケモンGO

ポケモンGO